

## 広島市における感染症発生動向調査結果について(2010年)

### 生活科学部

#### はじめに

広島市では、広島市感染症発生動向調査事業実施要綱に基づき、衛生研究所に感染症情報センターを設置し、市域の感染症情報を集計、解析するとともに、その結果をホームページ等により、市民、関係機関等へ提供している。

今回、2010年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

#### 方法

##### 1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症(エボラ出血熱等7疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等5疾患)、三類感染症(コレラ等5疾患)、四類感染症(E型肝炎等41疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等16疾患)および定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等25疾患)の合わせて99疾患とした。

##### 2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位または月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出される。各保健センターは、感染症発生動向調査システムにより患者情報を感染症情報センターへ報告し、感染症情報センターでは中央感染症情報センター(国立感染症研究所)へ全市分の患者情報を報告するとともに集計処理を行った。

なお、市内の患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む)37、小児科定点24、眼科定点8、性感染症定点9、基幹定点7である。

##### 3 対象期間

全数把握対象疾患および月報対象の定点把握対象疾患については、平成22年1月1日～12月31日とし、週報対象の定点把握疾患は、平成22年1月4日～平成23年1月2日(2010年第1週～第52週)とした。

#### 結果

##### 1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症は結核、三類感染症は細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症、パラチフスの3疾患、四類感染症はE

型肝炎、A型肝炎、オウム病、つつが虫病、デング熱、レジオネラ症の6疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、梅毒、破傷風、風しん、麻しんの10疾患で、合わせて20疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2010年における各疾患の届出数を表1に示した。比較的届出数の多かった疾患(結核を除く)は次のとおりである。

##### (1) 腸管出血性大腸菌感染症

46件の届出があり、これまでの年間最高値(2004年の47件)に次ぐ届出数であった。これらはすべて散发事例であった。月別では、5月が17件と最も多く、5月から9月の5か月間に40件の届出があった。血清型別では、O157が26件と最も多く、次いでO26が10件、O121が7件、O103が3件であった。年齢別では、20歳未満が24件と52%を占めていた。

##### (2) 後天性免疫不全症候群

20件の届出があり、これまでの年間最高値(2009年の25件)に次ぐ届出数であった。このうち、エイズ患者が5件、HIV感染者が15件であった。

表1 全数把握対象疾患の届出数(2010年)

類型	疾患名	届出数
二類	結核	228
三類	細菌性赤痢	3
	腸管出血性大腸菌感染症	46
四類	パラチフス	1
	E型肝炎	1
	A型肝炎	4
	オウム病	1
	つつが虫病	8
	デング熱	2
	レジオネラ症	7
五類	アメーバ赤痢	10
	ウイルス性肝炎	6
	急性脳炎	10
	クロイツフェルト・ヤコブ病	4
	後天性免疫不全症候群	20
	ジアルジア症	3
	梅毒	4
	破傷風	1
	風しん	4
	麻しん	5

性別では、男性が19件とほとんどを占めていた。年齢別にみると、20歳代から40歳代が多く、この年齢層が17件と85%を占めていた。感染経路は、性行為によるものが18件とほとんどを占めており、同性間が13件、異性間が5件であった。

## 2 定点把握対象五類感染症

### (1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点および基幹定点から毎週報告される18疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当り累積報告数は、感染性胃腸炎の437人が最も多く、続いて流行性耳下腺炎77.4人、水痘73.2人、手足口病68.3人、流行性角結膜炎44.4人、インフルエンザ42.1人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎34.5人、突発性発しん28.6人、ヘルパンギーナ22.3人、咽頭結膜熱19.9人、RSウイルス感染症15.2人などとなっている。年間の推移に特長が認められたインフルエンザ、感染性胃腸炎、手足口病、流行性耳下腺炎およびRSウイルス感染症について、広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図に示した。

#### a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は42.1人で、前年の558人と比べ前年比0.07と大きく減少した。

2009/10シーズンは、2009年第34週に定点当り1.00人を超え、インフルエンザ(H1N1)2009の出現により、感染症発生動向調査開始以来最も早く流行期に入った。10月から急増し、第44週に定点当り34.6人と、警報レベルを超え、第48週に定点当り40.5人のピークとなった。第49週以降は減少し、2010年1月は定点当り6人前後で推移した後、第11週には定点当り0.84人とほぼ終息状態となった。

#### b 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は437人で、前年の334人と比べ前年比1.31とやや増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の55.1%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

第4週に定点当り18.7人のピークを迎えた後は定点当り15人以上の状態でも推移したが、3月上旬頃から減少傾向となり、夏季は低い水準であった。11月上旬から増加が始まり、第49週に定点当り22.5人のピークを迎えた。

#### c 手足口病

年間の定点当り累積報告数は68.3人で、前年の12.1人と比べ前年比5.62と大きく増加した。年間

の累積報告数は、小児科定点患者総数の8.6%であった。

2月に入ってから増加が始まり、4月下旬の第16週に定点当り4.92人のピークを迎え、その後減少し定点当り2人前後の状態でも推移した。7月から再び増加し、第27週に定点当り3.70人のピークを迎えた後は減少傾向となり、9月中旬にはほぼ終息した。手足口病は通常夏季に流行するが、今年は春季より増加し、例年に比べ流行期間が長かった。

#### d 流行性耳下腺炎

年間の定点当り累積報告数は77.4人で、前年の41.1人と比べ前年比1.88と増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の9.7%で、小児科定点報告対象疾患のうち2番目に多かった。2007年から2008年にかけて流行はほとんどみられなかったが、2009年の年初より増加傾向となり、2010年も多い状態でも推移したが、10月頃より減少傾向となった。

#### e RSウイルス感染症

年間の定点当り累積報告数は15.2人で、前年の14.5人と比べ前年比1.04とほぼ横ばいであった。2009年第52週に定点当り2.96人のピークを迎え、2010年は年初から減少傾向でも推移し、第17週から第31週にかけては、ほとんど報告はなかった。

### (2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患および基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患)の報告数を表3に示した。

#### a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の31.3人で、次いで淋菌感染症の23.4人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比0.90とやや減少した。

#### b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が83.9人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症8.14人、薬剤耐性緑膿菌感染症1.13人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比0.91とほぼ横ばいであった。

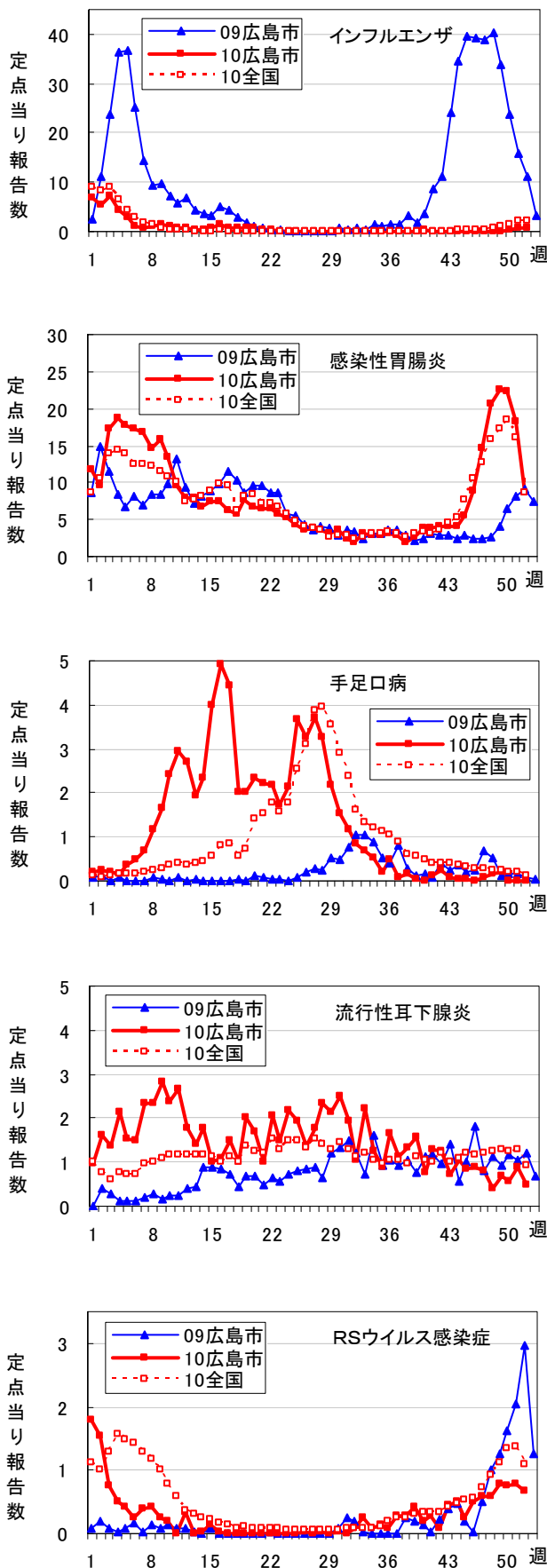


図 定点当り報告数の週別推移

表 2 定点把握対象五類感染症患者報告数 (週単位報告分) (2010年)

疾患名	報告数
インフルエンザ	1,556 (42.1)
咽頭結膜熱	473 (19.9)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	825 (34.5)
感染性胃腸炎	10,473 (437)
水痘	1,753 (73.2)
手足口病	1,627 (68.3)
伝染性紅斑	177 (7.41)
突発性発しん	683 (28.6)
百日咳	234 (9.79)
ヘルパンギーナ	525 (22.3)
流行性耳下腺炎	1,847 (77.4)
RSウイルス感染症	366 (15.2)
急性出血性結膜炎	19 (2.42)
流行性角結膜炎	354 (44.4)
細菌性髄膜炎	11 (1.57)
無菌性髄膜炎	22 (3.12)
マイコプラズマ肺炎(オウム病を除く)	83 (11.9)
クラミジア肺炎	0 (0.00)

( )内は定点当り累積報告数

表 3 定点把握対象五類感染症患者報告数 (月単位報告分) (2010年)

疾患名	報告数
性器クラミジア感染症	282 (31.3)
性器ヘルペスウイルス感染症	90 (10.0)
尖圭コンジローマ	81 (9.02)
淋菌感染症	211 (23.4)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	587 (83.9)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	57 (8.14)
薬剤耐性緑膿菌感染症	8 (1.13)

( )内は定点当り累積報告数